

Title	一七・八世紀における寛永通寶の流通状況：北部九州の考古学事例より
Sub Title	Circulation of copper currency Kan'ei Tsuho (寛永通寶) in the seventeenth and eighteenth century : an analysis of buried copper currency, Rokudosen (六道錢) in the Kyushu District
Author	櫻木, 晋一(Sakuragi, Shinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.1 (1990. 3) ,p.79- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900300-0079">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900300-0079</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 一七・八世紀における寛永通寶の流通状況

—北部九州の考古学事例より—

櫻木晋一

## 目次

- 一 はじめに
- 二 六道錢出土遺跡
- 三 セリエーション分析
- 四 六道錢の枚数
- 五 墓の時期決定
- 六 特徴ある錢貨
- 七 鳥居埋納の錢貨
- 八 成果と課題

## 一 はじめに

従来の江戸時代における貨幣流通の研究は、本位貨幣たる金貨・銀貨が中心であり、庶民経済に欠くことのできない錢貨流通の実証的研究は、現在までのところ十分になされていない。例えば、中世において広汎に流通し

ていた渡来錢が、どの程度の迅さで、幕府公鑄貨の寛永通寶と交替していったのか定かではない。その理由の一つは、実証的研究に必要とされる一七世紀の錢貨流通に関する史料が乏しかつたせいであるが、出土六道錢の組合せによる考古学資料の分析によつて、新しい可能性がみいだされることになった。この方法は、従来全くとりあげられていなかつた考古学資料の分析という点で、期待のもてるものだが、いくつかの点で注意すべき点がある。それは、錢貨は伝世されるので遺構の下限を決定できることや、副葬された錢貨が、当時流通していた錢貨の割合をそのまま反映しているのかといったことである。しかし、全国的に多数の出土例に基づいて研究が行われるならば、この分析方法は、錢貨の流通状況を知るのに有効なアプローチとなると思われる。

本稿は、この出土六道錢の組合せから、江戸時代前期<sup>(1)</sup>の銅錢流通の実態を明らかにしようとした鈴木論文<sup>(2)</sup>をうけて、北部九州地方でも同様の検討を行おうと試みるものである。鈴木論文は関東地方を中心とした資料を使用したものであったが、本稿は、北部九州三県（福岡・佐賀・長崎）について資料を集計し、分析した。北部九州地方には、中世墓や江戸時代前期の近世墓の調査例が比較的乏しく、江戸時代初期の銭貨流通の実態を把握することに限定すると、資料不足の感は否めない。従つて本稿では、収集資料の関係で対象時期を拡大し、一七・八世紀の寛永通寶の流通状況を明らかにすることにした。結論からいえば、関東と九州という若干の地域差はみられるものの、北部九州地方の資料も、鈴木論文を否定するような事実を、現在のところ示してはいない。

## 二 六道錢出土遺跡

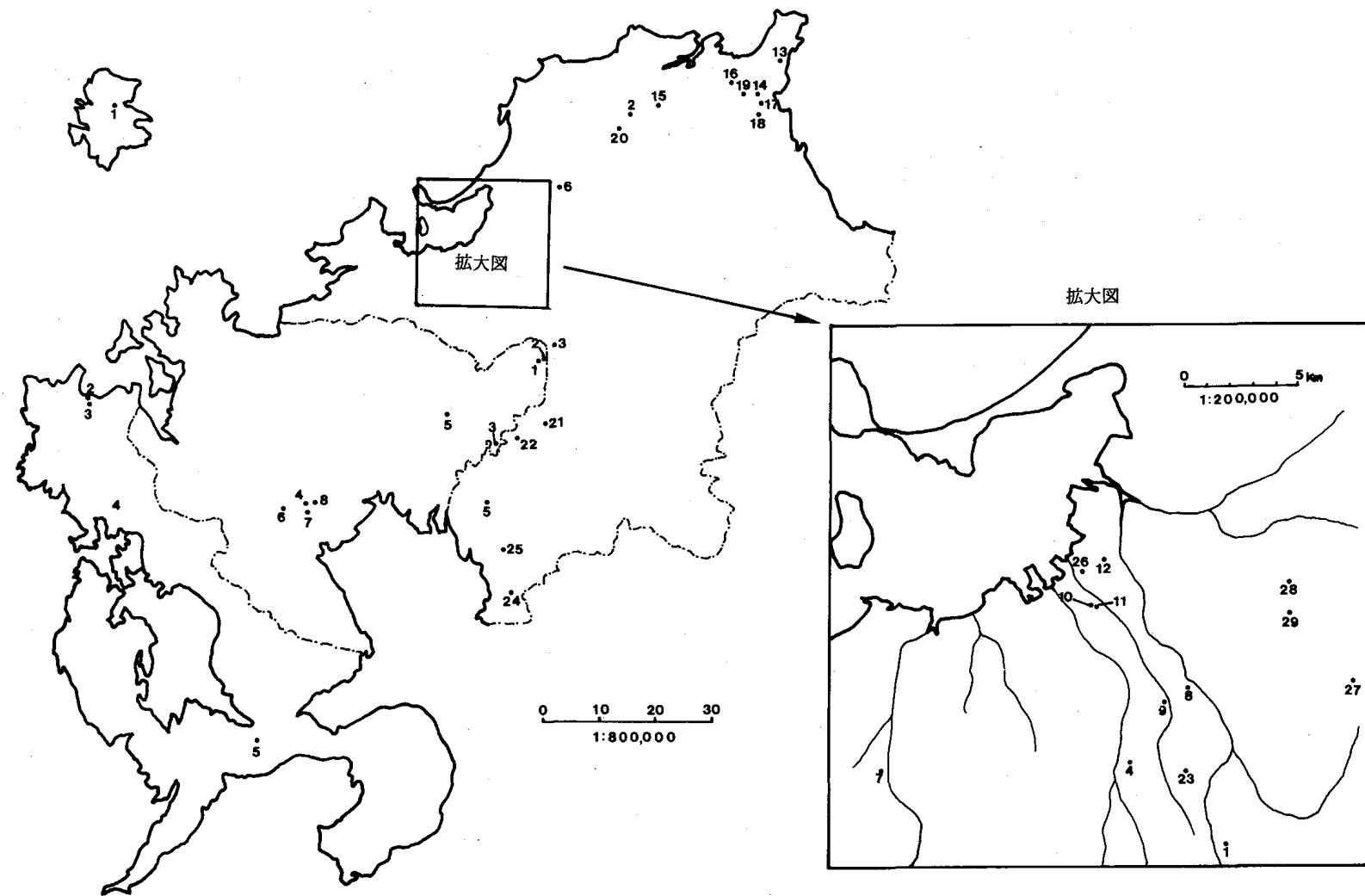
六道錢と呼ばれている錢貨が、中・近世墓に副葬されていることは、広く知られている事実である。しかし、その起源や実態については、ほとんどわかつていな。死者を葬る時棺内に収める錢のこと。通常は紗にて作れる頭陀袋を死者の頸にかけ、錢六文を中心に容れ、或は

単に墨にて錢形を袋に書くことあり。俗説にては中有に在りて六道を輪廻する時の路用にして、三途川の渡錢等に使用せしむる為なりと云へり。……」とあるが、詳しい研究は、仏教関係者や民俗学者の間でも為されていないうである。

副葬品を墳墓に添える風習は、古代から存在していた。まれに錢貨が出土するものもある。例えば、和同開珎を含む七枚の錢貨を出土した福岡県結浦遺跡<sup>(3)</sup>、一九枚の皇朝十二錢を出土した福岡県汐井掛五号墳<sup>(4)</sup>などが知られているが、これは何らかの祭祀・呪術のために供された錢貨と思われ、六道錢とは系譜が異なる可能性も考えなければならない。また、墓に錢貨を副葬する風習が、ギリシャ、ローマから現在のヨーロッパ各地にも認められるという記述もあり、洋の東西を問わずこのような風習が存在するのは興味深い。

六道錢を副葬する風習は、おそらく六道絵などによる六道思想の普及とともに定着していくものと思われ、中世に始まり、行政の末端組織として仏教寺院がとりこまれていく近世までには、広汎に行なわれていたと考えられる。また、このような風習が定着していく背景には、貨幣の流通が盛んになり、貨幣量が増加していく

図 I 六道銭出土遺跡地図（北部九州三県）



福岡県

表 I 六道錢出土遺跡一覽表

	遺 跡 名	時代	墓数	六道錢 出土墓	文 獻
1	唐人塚	○	中・近	4	九州縦貫自動車道関係 X VIII 福岡県教委 1977
2	音丸城	○	中	1	九州縦貫自動車道関係 X X III 福岡県教委 1978
3	北牟田	○	中	5	九州縦貫自動車道関係 X X X I 上巻 福岡県教委 1979
4	門田辻田地区	○	近	41	山陽新幹線関係第9集 福岡県教委 1978
5	觀音丸	○	中	4	觀音丸遺跡 福岡県教委 71集 1985
6	犬鳴ダム		近	16	福岡県教委
7	金武古墳群	☆	近	5	金武古墳群発掘調査報告 福岡市教委 15集 1971
8	板付周辺G-5a	☆	近	5	板付周辺遺跡調査報告書(3) 福岡市教委 36集 1976
9	諸岡	☆	近	6	諸岡遺跡 福岡市教委 108集 1984
10	天福寺	★	近	388	博多III 福岡市教委 118集 1985
11	博多28次	☆	近	?	数基 博多VII 福岡市教委 147集 1987
12	馬出東工区	★	近	65	博多一高速鉄道関係調査(4)一 福岡市教委 193集 1988
13	御堂	☆	中・近	14	御堂遺跡 北九州市教育文化事業団 25集 1984
14	葛原(B)	★	近	4	葛原(A)(B)遺跡 北九州市教育文化事業団 27集 1984
15	白岩西	★	中	233	白岩西遺跡 北九州市教育文化事業団 43集 1985
16	北方	★	中・近	28	北方遺跡 北九州市教育文化事業団 48集 1986
17	畠山	★	近	1	畠山遺跡 北九州市教育文化事業団 57集 1987
18	御座遺跡群	★	中・近	約100	埋蔵文化財調査室年報3 北九州市教育文化事業団 1987
19	上清水	★	中・近	693	埋蔵文化財調査室年報5 北九州市教育文化事業団 1989
20	安城遺跡群	★	近	30	安城遺跡群 鞍手町教育 4集 1986
21	下見	☆	近	42	S 52年度東部土地区画整理 久留米市教委 19集 1978
22	坂本遺跡	★	近	3	久留米市教委 未刊
23	豆塚山	☆	近	?	春日市教委 未刊

24	大間C地点	○	近	13	1	昭和58年度埋蔵文化財発掘調査概要 大牟田市教委 1984
25	堀切寺屋敷	★	近	34	2	藤の尾垣添遺跡II 瀬高町教委 5集 1989
26	墨田長政墓	○	近	1	1	森克巳「宋銅錢の我が国流入の端緒」 「史淵43」 1950
27	塔ノ尾	★	中	5	1	塔ノ尾遺跡 宇美町教委 1981
28	大谷	★	近	?	1	柏原郡須恵町大字植木字大谷所在の近世墓 須恵町教委所蔵 未刊
29	南米里	★	近	?	2	柏原郡須恵町大字上須恵字南米里所在の近世墓 " 未刊

佐賀県

1	千塔山	★	近	18	1	千塔山遺跡 基山町遺跡発掘調査団 1978
2	城ノ上	☆	近	25	2	城ノ上遺跡 基山町教委 1集 1977
3	天建寺土井内	★	近	9	6	天建寺土井内遺跡 三根町教委 1985
4	馬洗神辺	★	近	3	3	農業基盤整備に係る文化財調査報告書 佐賀県教委 74集 1984
5	朝日北	☆	近	?	?	九州横断道関係概報 佐賀県教委 1983 (遺物未整理)
6	みやこ	○	近	1	1	みやこ遺跡 武雄市教委 15集 1986
7	湯崎東	★	近	約 50	1	湯崎東遺跡 白石町教委 1集 刊行予定
8	多田	★	中・近	3	1	佐賀県農業基盤整備に係る文化財調査報告書 佐賀県教委 90集 1989

長崎県

1	京塚	○	近	?	6	京塚遺跡 芦辺町教委 1集 1983
2	楼楷田	★	近	8	1	楼楷田遺跡 長崎県教委・松浦市教委 76集 1985
3	松浦皿山窯址	☆	近	2	1	長崎松浦皿山窯址 松浦市教委 1982 (埋め戻したため現物はない)
4	山本入道墓	★	近	2	1	島瀬センターだより 1988No.1 佐世保市博物館
5	花ノ木	★	明治	1	1	練早市教委 (野田鉄治氏寄贈) 練早市久山町花ノ木106所在

遺跡名の末尾★印は報告者が現物を確認したもの。☆印は現物が行方不明又は埋め戻してしまったもの。

○印は報告書等で確認ができ、現物をみていないもの。

という前提が存在することも忘れてはならない。多量の錢貨が、備蓄錢という形で発見されることがあるが、この備蓄錢は中世社会に流通していた貨幣量の多さを示しており、中世にこのような豊富な貨幣量と信仰の問題が相俟って、六道錢を副葬する風習が広まつたと想像される。

出土六道錢について、今後詳しい報告と分析が行われことになるとと思われるが、調査時点で留意しておくべき二・三の点を指摘しておきたい。まず、出土状態の詳しい観察、記録が必要である。錢貨が銹着して一塊で出土する場合が多いが、一枚ずつバラバラで出土することもある。つまり、副葬された時点でのどのような状態だったかを推察することが、当時の習俗を知る上で必要である。銹着しているものの多くは、纖維質のものか、紙で包まれているケースが多い。また、孔に紐を通したものもあり、紐の痕跡だけが残っている場合もあるので、注意して観察する必要がある。紐の材質も様々なものがある。出土位置についても、注意する必要がある。遺体が埋葬後移動することもあるので、六道錢も原位置を移動している可能性があるが、今までのところ棺の中心近くから出土したものが多いようにみうけられる。頸に頭陀

袋をかけたのか、手にもたせたのか、足元においていたのかなど、考察する必要がある。骨の遺存状況と六道錢の副葬の有無の相関関係にも気を付ける必要がある。改葬がおこなわれた可能性もあるので、遺体埋葬時にどのくらいの割合で六道錢が副葬されていたかを把握することが重要である。

九州では、遺跡調査区域内に近世墓の存在が確認されても、発掘に際して種々の障害があり、発掘調査が行われない場合も多い。また、調査が為されても報告書に記載されていない場合もあり、齊藤隆による一九八一年時点の六道錢出土遺跡集計<sup>(8)</sup>をみると、福岡・佐賀を合わせても九遺跡しか存在しない。しかし、今回の筆者の調査によると表Iのように、現在までに三県で、現在発掘中のものを除き四二遺跡を確認することができた。なお、図Iには各遺跡の分布を示しておいた。（地図上の番号は表Iの遺跡名の前の番号と一致している。）

表Iから、北部九州三県の六道錢を出土した中・近世墓は約二二〇基あることを確認できる。地域開発と道路網の整備の結果発掘されたものが多く、図Iからこれらの大半は、福岡市と北九州市に所在していることがわかる。近世考古学に対する認識の高まりにつれ、ここ数年

間に近世墓についてもかなり調査が行われるようになつた結果である。

ここで注意しておかなければならぬことは、六道錢の副葬率について、副葬墓数÷全墓数で単純に求めることはできないということである。その理由は、発見された土壙の全てが、ほんとうに墓なのかどうか遺骨・副葬品がないために決定できないものや、改葬後の甕棺の抜き跡も墓数に含まれているからである。全体の副葬率を表Ⅰから上記の単純な方法で割り出すと、約一二%となるが、実際はこれより少々高くなるはずである。それでも、江戸近郊よりは、副葬率が低い。その理由については、錢貨が潤沢になかつたから、風習の地域差で紙錢を用いていた可能性、宗派の関係など、様々な推察ができるが、現在その原因を確定するには到らない。

### 三 セリエーション分析

出土六道錢を分析するために、錢貨を渡来錢（模鋳錢を含む）と、寛永一三年（一六三六）初鋳の古寛永、寛文八年（一六六八）初鋳の背面に「文」字を有するいわゆる文錢、元禄一〇年（一六九七）以降の新寛永、元文四年（一七三九）以降に鋳造された鉄を素材とする寛永

鉄錢の五種に分類する。この五種類の錢貨がどのような組合せになつてゐるかを遺跡ごとに示したものが、表Ⅱ（その1・その2）である。その2の総計より、六枚の錢貨のみからなる、いわゆる完全セット五八基を含む一七九基を確認できる。二二〇基より少くなつてゐるのは、判読不能錢のみのものや、銹着したままで分析不能なものがあるためである。福岡県のみで、一五六基（内五四基完全セット）と大半を占める。

未公開資料の中に、多数の六道錢を副葬した遺跡が存在しており、関係諸機関の御好意で、筆者が分析をすることを許されたので、以下、福岡市所在の天福寺（三八八基中六四基六道錢出土）・馬出東工区（六五基中一八基<sup>(9)</sup>）と、北九州市所在の上清水（六九三基中四一基）・御座（約一〇〇基中六基<sup>(10)</sup>）の四遺跡から出土した六道錢を中心考察を進めることにしたい。

鈴木論文同様、分析の方法として、遺物の出現頻度によるセリエーションを採用する。個々の器物の出現→盛行→消滅に至る量的変化のパターンは、ふつう「軍艦型のカーブ」と呼ばれるものになることは、よく知られてゐる。

簡単にセリエーション分析の手順を説明すると、

12 馬出東工区	13 御堂	14 葛原B	15 白岩西	16 北方	18 御座	19 上清水	20 安城	22 坂本	24 大間C
				5 (1) 2	1				
(1) 1					(1) 1	1	1		
1 1					1 1				
1 (1) 2 (1) 2 (1) 2 (2) 2	(1) 1			(1) 1 (1) 2 (1) 1 (2) 2	(2) 5 5		(1) 1		1
3		1		1		(4) 12	(1) 1		
(1) 2									
(6) 14 (1) 2	1	5 (1) 3	(4) 7 (19) 37	(1) 3 (1) 1					1

表II 六道銭の組合せ一覧（その1）

一七・八世紀における寛永通寶の流通状況

福岡県

遺跡名 六道銭の組合せ	1 唐人塚	2 音丸城	3 北牟田	4 門田辻田	5 觀音丸	7 金武古墳群	8 板付	10 天福寺
渡来銭のみ	(1) 2	1	1		2			1
渡+古				1				1
渡+古+文				1				2
渡+古+文+新								2
渡+古 +新								(1)
渡 +文								1
渡 +文+新								1
渡 +新				1				1
古寛永のみ				1		1	1	(1) 8
古+文							(1) 2	(4) 9
古+文+新								(6) 14
古 +新				1				(4) 6
文銭のみ								(1) 3
文+新				1				1
新寛永のみ				1				5
鉄銭のみ								1
渡 +鉄								
渡+古 +鉄								
渡+古+文 +鉄								
渡+古+文+新+鉄								
古 +鉄								
古+文 +鉄								
古+文+新+鉄								
文 +鉄								
文+新+鉄								
新+鉄								
古 +新+鉄				1				
文久通宝のみ								
文久+明治								
合 計	(1) 2	1	1	8	2	1	(1) 3	(18) 59

史 学 第五十九卷 第二号

八八（八八）

総計

(4)	23
2	2
3	3
(2)	4
(1)	2
(1)	1
(1)	2
	3
(1)	19
(7)	17
(11)	25
(13)	19
(1)	6
(4)	6
(5)	28
(1)	3
(1)	3
(4)	7
(2)	5
	1
(58)	179

長崎県

6 みやこ	7 湯崎東
1	1
1	1

1 京塚	2 樓楷田	4 山本入道墓	5 花ノ木
1			
2		1	
1	(1) 1		
1			
5	(1) 1	1	1

六道銭の組合せ一覧 (その2)

一七・八世紀における寛永通寶の流通状況

遺跡名	25 堀切寺屋敷	26 黒田長政墓	27 塔ノ尾	佐賀県	1 千塔山	2 城ノ上	3 天建寺土井内	4 馬洗神辺
六道銭の組合せ								
渡来銭のみ	1 (1)	1	1				1 (1)	1
渡+古								
渡+古+文								
渡+古+文+新								
渡+古 +新								
渡 +文								
渡 +文+新								
渡 +新								
古寛永のみ								
古+文	2							
古+文+新								
古 +新								
文銭のみ								
文+新								
新寛永のみ								
鉄銭のみ								
渡 +鉄								
渡+古 +鉄								
渡+古+文 +鉄								
渡+古+文+新+鉄								
古 +鉄								
古+文 +鉄								
古+文+新+鉄								
文 +鉄								
文+新+鉄								
新+鉄								
古 +新+鉄								
文久通宝のみ								
文久+明治								
合 計	3 (1)	1	1		1 (2)	2	7 (1)	3

① 横軸には、年代の古い順に渡来銭、古寛永、文銭、新寛永、寛永鉄銭を並べ、縦軸は、上を古い時期とする時間軸とする。銭貨は初鋳年が知られているので、この時間軸上における上限年代を固定できるという利点をもつ。

② 完全セット五八例のみを、一例ずつ軸の中心から対称になるように時間軸上に配列し、軍艦型のカーブを描くようとする。

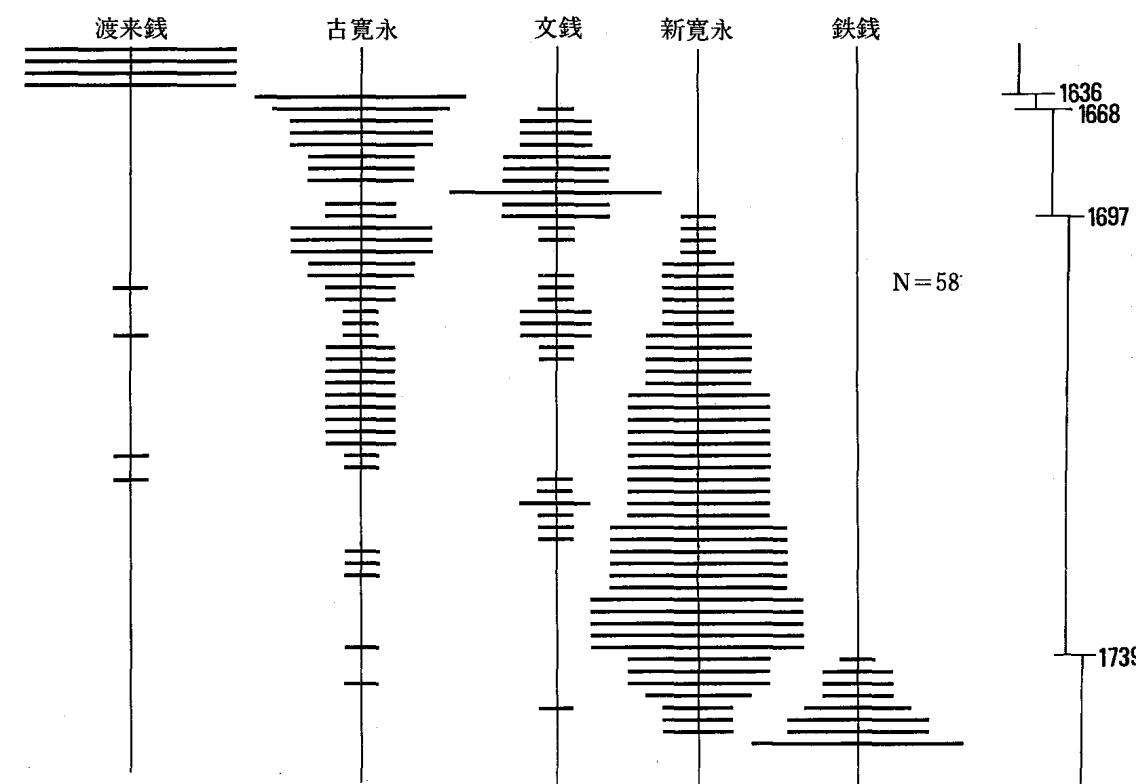
③ ②の際、二種以上の銭貨が含まれているセットを軸上に配列する場合、最も新しい銭貨の示す上限年代よりも遡った軸上には配置しない。

以上のような手順で、出土六道銭完全セット五八例を資料としてセリエーションを組んだものが、図IIである。六枚組のものだけを使用した理由は、六枚という数は攬乱をうけておらず、副葬時本来の枚数と思われるからである。

この図から読み取ることは、

① 渡来銭と寛永通寶の流通には、不連続性が認められる。

② ①とは対照的に、古寛永から文銭、文銭から新寛永、新寛永から寛永鉄銭への交替は漸移的である。



図II 北部九州地方（福岡・佐賀・長崎県）出土六道銭完全セットのセリエーション

(3) 古寛永と文銭は、寛永鉄銭が出現する一八世紀中期にはほとんど姿を消す。渡来銭にいたっては完全に姿を消し、寛永鉄銭と組合わされることはない。

①②から、鈴木論文で示されたように、幕府が何らかの錢貨政策を実施し、渡来銭から寛永通寶への通貨の切り替えをすみやかに行つたのではないかと推測できる。

現在までのところ、江戸初期の錢貨政策にかかる東海道宿場史料のごとき記録類が、北部九州地方では知られておらず、長崎街道でもこの種の史料の発見が待たれる。また、新寛永から寛永鉄銭への交替も、鈴木論文で予測されていたように、漸移的であることが初めて確認できた。

(3) の古寛永と文銭が時代とともに減少していくのは、ただ単に古い錢貨だから磨耗等により混入割合が減少していくたとみなすだけではなく、錢貨の材質から見て、寛永鉄銭の普及により良貨と認識されていた銅銭が退藏されていった結果と考える必要もある。特に文銭は、規格化された良銭であり、現存しているものは状態の良いものが多い。渡来銭と新寛永が組合わされるのは四例であり、それも渡来銭が一枚ずつで、この渡来銭は流通市場に僅かに残っていたものか、退藏されていたも

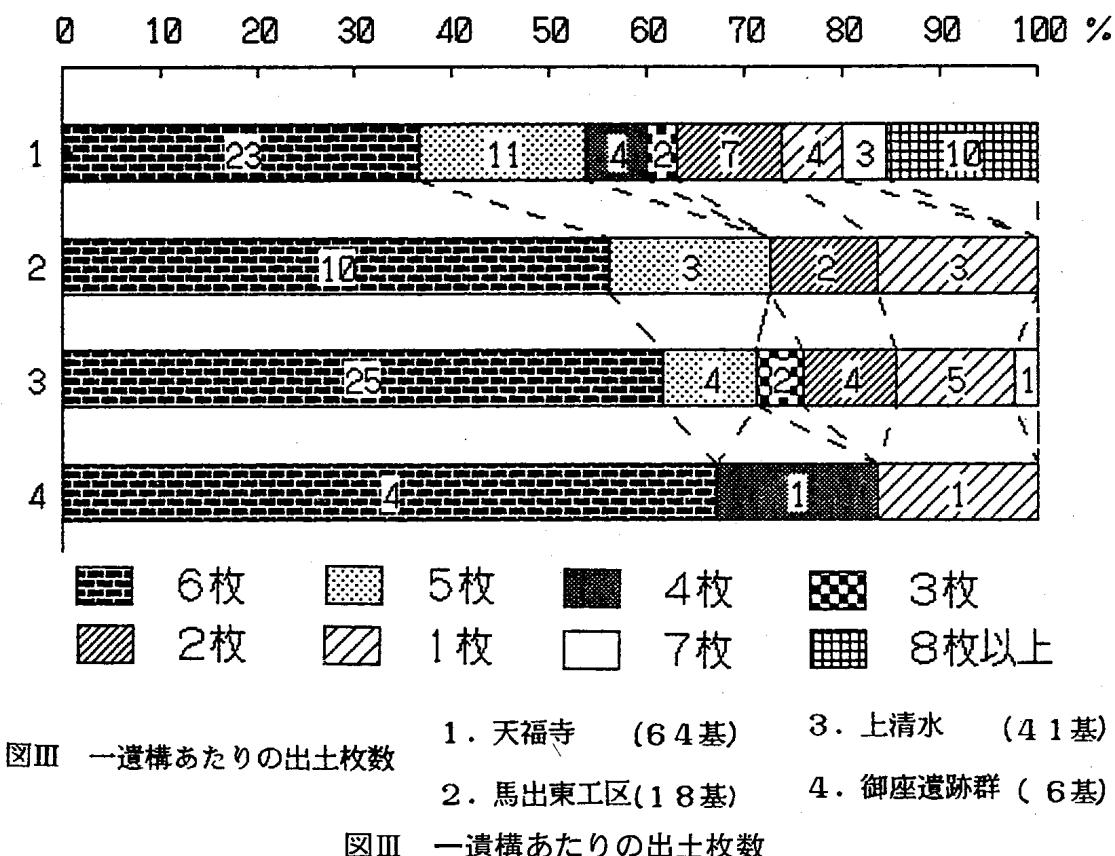
のと考えられる。従つて、寛文一〇年（一六七〇）の古銭の通用禁止令以後は、寛永通寶以外の錢貨はほとんど流通市場から消えてしまつていたと想像される。

また、古寛永と文銭のパターンが数段にくびれて、瓢箪型を示していることについては、古寛永と文銭が比較的短期間のうちに鋳造された良銭であり、両貨が区別されることなく使用された結果であると考えられる。「図録日本の貨幣」<sup>(11)</sup>によると、古寛永と文銭の鋳造量の推定値は、それぞれ三二五万貫と一九七万貫であり、セリエーション上でも両貨の比率は、横軸にあらわれており、この推定値と矛盾しないパターンを描いている。

古寛永と文銭の鋳造比率がセリエーション上にあらわされることや、切い合いや層位的に下層と認定できる墓で古寛永の割合が高いことが天福寺で確認できる。これらのことから考えて、当時流通していた錢貨をそのまま六道銭として副葬したと考える方が自然だと思われる。（ただし、山間部では、あえて古い錢貨を選んで副葬した例があることも確認している。）

#### 四 六道銭の枚数

図IIIは、天福寺・馬出東工区・上清水・御座の四遺跡



図III 一遺構あたりの出土枚数

で、一基あたり何枚の六道銭が出土したかを示した図である。一～七枚までと八枚以上に区分した。六枚が一番代表的な数 ( $62 + 129 = 0.481$ ) であることは、異存のないところであるが、七枚という数も鹿児島などの地域ではよくみられるので個別にとりあげ、それ以上は一括した。ここで気付くことは、天福寺では、六七枚、四九枚、三九枚、二五枚、二三枚というぐあいに、八枚以上の大量の銭が副葬されているケースが一〇例も存在することである。これらのほとんどは、古寛永が主体となつておらず、一七世紀中・後期の墓と推定され、六枚副葬が一般化していく時期を示唆していると思われる。新寛永を主体とする二桁の枚数の副葬が一例（天福寺二五八号）しかないことから、新寛永鑄造時期の一七世紀末から一八世紀初めに、北部九州地方では、六枚一組の埋納が一般化すると推定できる。ただし、中世墓や天福寺二三七号墓のように一七世紀中期までのものとみられる六枚セットも存在する。このことは六枚一組で副葬する習慣が、一八世紀まで一般的でなかつたということではなく、中世末から近世初期にかけて、六枚一組で副葬する習慣が定着していく中で、一八世紀初期までは、多数の錢貨を副葬するものがあつたと考えられる。渡来錢だけ

表III 出土六道銭の内訳

遺跡名	副葬 墓数	六道銭 枚数	内訳									
			渡	古	文	新	鉄	NEW	寛	念	明	
天福寺	64	509	13	227	78	101	5	17	26	1	0	41
馬出東工区	18	82	1	10	6	29	13	0	4	0	1	18
上清水	41	196	1	23	11	109	22	0	3	0	0	27
御座遺跡群	6	29	1	11	6	11	0	0	0	0	0	0
合計	129	816	16	271	101	250	40	17	33	1	1	86

渡は渡来銭、古は古寛永、文は文銭、新は新寛永、鉄は寛永鉄銭、NEWは文銭か新寛永かがわからないもの、寛は寛永通寶であることはわかるもの、念は念仏銭、明は明治の貨幣。

## 天福寺

渡来銭	13枚 ( 3.1%)
念仏銭	1枚 ( 0.2%)
古寛永	227枚 ( 53.4%)
文銭	78枚 ( 18.4%)
新寛永	101枚 ( 23.8%)
寛永鉄銭	5枚 ( 1.2%)
判読可能銭	425枚 (100.1%)

## 馬出東工区

渡来銭	1枚 ( 1.7%)
古寛永	10枚 ( 16.7%)
文銭	6枚 ( 10.0%)
新寛永	29枚 ( 48.3%)
寛永鉄銭	13枚 ( 21.7%)
明治	1枚 ( 1.7%)
判読可能銭	60枚 (100.1%)

## 上清水

渡来銭	1枚 ( 0.6%)
古寛永	23枚 ( 13.9%)
文銭	11枚 ( 6.6%)
新寛永	109枚 ( 65.7%)
寛永鉄銭	22枚 ( 13.3%)
判読可能銭	166枚 (100.1%)

## 御座

渡来銭	1枚 ( 3.4%)
古寛永	11枚 ( 37.9%)
文銭	6枚 ( 20.7%)
新寛永	11枚 ( 37.9%)
判読可能銭	29枚 ( 99.9%)

からなる二桁の枚数の墓も北方・觀音丸・多田遺跡などで出土していることから、副葬枚数の多い墓は古い時期のものと考えてよいと思われる。

表IIIの六道銭の内訳からは、四遺跡における墓のおおよその造営期を知ることができます。判読可能な銭のみについてみてみると、天福寺では古寛永が二三七枚(五三・四%)と圧倒的に多く、文銭が七八枚(一八・四%)で、一七世紀に鋳造された古いタイプの寛永通寶が約七割を占めており、近世でも比較的古い時期の墓

## 五 墓の時期決定

からなる二桁の枚数の墓も北方・觀音丸・多田遺跡などで出土していることから、副葬枚数の多い墓は古い時期のものと考えてよいと思われる。

表IIIの六道銭の内訳からは、四遺跡における墓のおおよその造営期を知ることができます。判読可能な銭のみについてみてみると、天福寺では古寛永が二三七枚(五三・四%)と圧倒的に多く、文銭が七八枚(一八・四%)で、一七世紀に鋳造された古いタイプの寛永通寶が約七割を占めており、近世でも比較的古い時期の墓

が多いことがわかる。御座でも古寛永・文銭を合わせると約六割で同様のことが読み取れる。しかし、馬出東工区では新寛永が二九枚（四八・三%）、寛永鉄錢が一三枚（二一・七%）と、一八世紀以降に铸造された新しいタイプの寛永通寶が約七割を占めている。上清水でもこの新しいタイプの寛永通寶が約八割を占め、一八世紀以降に造られた墓が多いことがわかる。従つて、各銭貨の割合から、遺跡としては天福寺と御座が古く、馬出東工区と上清水は新しいことがわかる。発掘される近世墓は墓標を伴わないものが多く、副葬品もあまり多くない。

このことが、墓の時期決定を難しくしているのだが、六道錢を副葬している場合は、各銭貨の割合をみると、よつて、およその年代を推定できる。今後、墓壙の形態・棺の種類・棺の型式・その他の副葬品によって、近世墓の編年ができる可能性はある。しかし、墓壙の形態や使用棺材にみられるように、地域差等があることを考慮しなければならない。例えば、福岡平野から佐賀平野にかけては、甕棺が普及しているし、北九州市には甕棺はほとんどない。関東で早桶が多いのに對して九州は甕棺・早桶・箱式木棺などバラエティに富んでいる。また、地域差のみでなく階層差や時期差や宗派などに起因する

差異もあると思われるので、注意を要する。

比較的短期間に铸造された古寛永と文銭の割合が高いことは、中世の領国貨幣経済から、徳川氏による全国一円支配体制の確立によつて、九州の地まで幕府公鑄貨が速やかに浸透してきたことを示す証拠として注目する必要がある。

## 六 特徴ある銭貨

新寛永の中でも、マ頭通（通の字の旁上部がコではなくマになっているもの）とよばれているもののがかなりある。また、背面に「元」字を有する銭も目につく。京都七条錢（一七二六年初鋤のもの）・鳥羽錢（一七三六年初鋤）・伏見錢（一七三六年初鋤）といわれている寛永通寶はマ頭通であることや、背「元」の寛永通寶が摂津高津錢（一七四一年初鋤）であることから、関西で铸造された銭貨が、かなり九州に流入しているようである。このことは、流通圏を考える上で手がかりになると思われる。

北部九州の铸造地、長崎でつくられた背「長」を有する銭が、門田辻田地区で一例だけしか発見されていない点も興味ある事実である。铸造量の少なさを反映してい

表IV 北部九州出土六道銭に含まれる渡来銭の枚数リスト

一七・八世紀における寛永通寶の流通状況	1 唐人塚	1号 洪武通寶 6 3号 洪武通寶 2 紹・元寶 1 5号 熙寧元寶 1 元豐通寶 1 元祐通寶 1 2号 元豐通寶 1 7号 熙寧元寶 1 8号 嘉慶通寶 1 道光通寶 1 36号 祥符元寶 1
	2 音丸城	1号 開元通寶 1 淳化元寶 1 祥符元寶 2 天聖元寶 4 皇宋通寶 1 熙寧元寶 3 元符通寶 1 元豐通寶 1 政和通寶 2 永樂通寶 3
	3 門田	26号 至道元寶 1 至和通寶 1 熙寧元寶 1 永樂通寶 1 天聖元寶 1
	4 北方	29号 永樂通寶 1
	5 安城	III 1号 開元通寶 1 VII 5号 天・通寶 1 V 3号 開元通寶 1 ·寧元寶 1 X 5号 皇宋通寶 1 B 12号 嘉祐元寶 1 開元通寶 1
	6 白岩西	2号 ·和元寶 1 紹熙元寶 1 永樂通寶 1 65号 永樂通寶 1
	7 北牟田	3号 太平通寶 1 景德元寶 1 祥符元寶 1 元豐通寶 2 政和通寶 1 淳祐元寶 1
	8 馬出	5号 太平通寶 1 治平元寶 1
	9 観音丸	20号 洪武通寶 3
	10 堀切寺屋敷	37-2 景祐通寶 1 元祐通寶 1 265 咸平元寶 1 54 ·元寶 1 283 康熙通寶 1 78 景德元寶 1 414 元祐通寶 1 164 康熙通寶 2 485 咸 · · 1 259 咸平元寶 1 489 治平元寶 1
	11 天福寺	67 永樂通寶 1
	12 御座	T I 2 天聖元寶 1 皇宋通寶 3 元豐通寶 3
	13 塔ノ尾	79 皇宋通寶 1
	14 上清水	天聖元寶 2 皇宋通寶 1 元豐通寶 1 元祐通寶 1
	15 黒田長政墓	S P001 元祐通寶 4
	16 馬洗神辺	S K205 洪武通寶 4
	17 みやこ	S P601 元豐通寶 1 S P405 康熙通寶 1
	18 天建寺	7号 熙寧元寶 1
	19 京塚	

下線があるものは、寛永通寶を伴う近世墓。

るものと思われる。

表IVは、北部九州三県で出土した六道錢のなかの渡來錢を集成したものである。判読不能なものや、欠字のあるものを除くと、一九遺跡三九墓で九六枚が知られている。錢貨名は二五種類あり、各々の錢貨の出土総数は表Vの通りである。目立って数の多いものはなく、少量ずつ多くの種類の錢貨が出土している。元豊通寶（一〇・四%）、天聖元寶（八・三%）、元祐通寶（八・三%）などの北宋錢は、備蓄錢でも出土例の多い錢貨であり、日本国内での流通量が多かつたと推定されるので、若干割合が高いのは自然なことと思われる。しかし東国とは異なり、渡來錢のなかで永樂通寶の占める割合が低いことがわかる。明錢では、むしろ洪武通寶のほうが目につく。現在までのところ、北部九州地方で永樂通寶が精錢として、多量に流通していたとは考えられない。洪武通寶の出土状況にも注目したい。一枚の内訳は六枚・二枚・三枚・四枚で、まとまって出土しているし、唐人塚三号の二枚以外は洪武通寶のみの出土である。洪武通寶が何らかの特別の意味をもつ錢貨であることを想起させる。九州で洪武通寶を模した加治木錢がつくられていたこととの関連を調べる必要もある。また、清錢の康熙通

錢貨名	初鑄年	枚数	錢貨名	初鑄年	枚数	錢貨名	初鑄年	枚数
洪武通寶	1368	15	康熙通寶	1662	4	至道元寶	995	1
元豊通寶	1078	10	政和通寶	1111	3	景祐通寶	1034	1
天聖元寶	1023	8	咸平元寶	998	2	嘉祐元寶	1056	1
元祐通寶	1086	8	景德元寶	1004	2	紹熙元寶	1190	1
永樂通寶	1408	8	治平元寶	1064	2	淳祐元寶	1241	1
熙寧元寶	1068	7	太平通寶	976	2	嘉慶通寶	1769	1
皇宋通寶	1039	7	淳化元寶	990	1	道光通寶	1821	1
祥符元寶	1008	4	元符通寶	1098	1			
開元通寶	621	4	至和通寶	1054	1			

表V 各錢貨の出土総数

寶が四点出土しており、念仏錢は一点しか出土していない。これらについては、収集資料の増加を待つて判定すべき点もあるが、「東の永樂・西の鑄錢」といわれるよう、永樂通寶が東国で広く好まれ流通したとされる点、念仏錢の铸造場所は関東近辺で、一七世紀初期につけられたといつた俗説などと示すことと矛盾しない。康熙通寶は一応渡來錢に含めているが、清錢であり、他の渡來錢とは性格が異なるので、区別して考えるべきである。康熙通寶の铸造期間は、一六六二～一七二二年であることから、どのようなルートで流入してきたかを考える必要がある。長崎貿易によってだろうか、あるいは密貿易によつてもたらされたのだろうか。

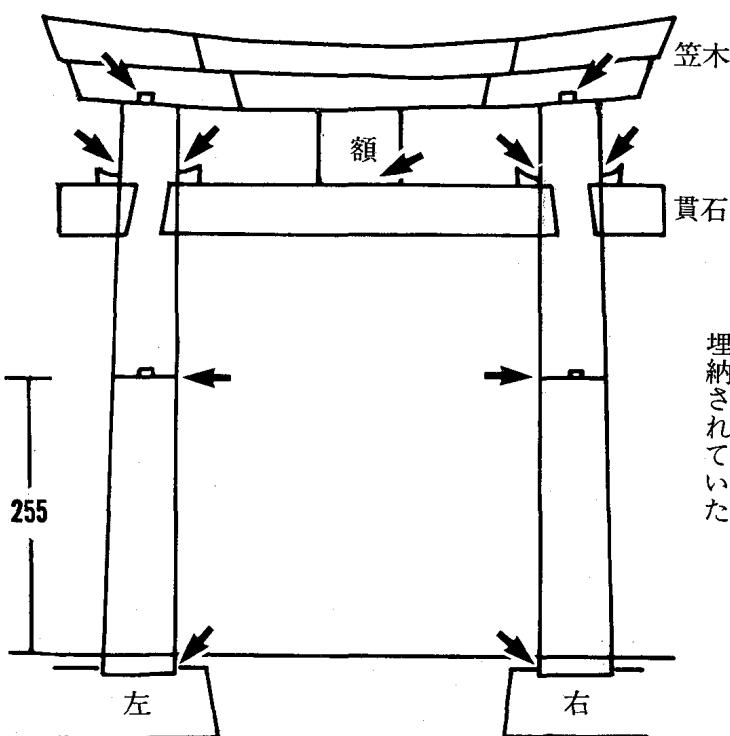
## 七 鳥居埋納の錢貨

出土六道錢とは性格が異なるが、ある一定時における錢貨の流通を知ることができる資料として、今回新発見の鳥居埋納錢について報告したい。<sup>(12)</sup>全く偶然の機会に発見されたものであるが、この鳥居に埋納されている錢貨の分類は、本稿で初めて公開される資料である。鳥居には、石材のつぎめに、建造当時に錢を埋納したものがある。文化財専門職員の立ち会いのもとで行われた、鳥居

解体作業によつて採集された錢貨は、資料としての価値が高い。現在までのところ太宰府天満宮一の鳥居の一例しか調査例は知られていないが、三五三枚とまとまつた数であり、資料として有効だと思われるので、以下に詳しく紹介する。

太宰府天満宮一の鳥居は、花崗岩でつくられており、

矢印の部分に錢貨が埋納されていた



図IV 太宰府天満宮一の鳥居

表VI 太宰府天満宮一の鳥居 錢貨一覧

発見場所	枚数	内訳					備考
		渡	古	文	寛	不明	
左柱 接合部	58	3	37	18			元祐通寶1、永樂通寶1、不明渡来錢1。
左礎石上面	4			1		3	
左柱貫石 接合部	36		16	7	1	12	
右柱 接合部	108	1	76	30	1		永樂通寶1。
右礎石上面	27		7	4		16	
右柱 貫石接合部	42		10	8	1	23	
額下	3		1	2			
笠木	75	2	52	17	3	1	元祐通寶1、祥符通寶1。
合計	353	6	199	87	6	55	不明錢の数は、破片が多く最少値。

\* 渡は渡来錢、古は古寛永(1636年初鑄)、文は文錢(1668年初鑄)、寛は寛永通寶だとわかるもの。

古 寛 永	199枚 (68.2%)
文 錢	87枚 (29.8%)
渡 来 錢	6枚 (2.1%)
判 読 可 能	292枚 (100.1%)

福岡藩四代藩主黒田綱政が元禄九年（一六九六）に奉納した紀年を有するものである。昨年、この鳥居の解体作業を行つた際、図IV及び表VIに示したように、様々な部位から少なくとも三五三枚の銅錢が採集された。採集場所は図IVの矢印で示してある。銭の状態は総じて良好だが、水分のたまりやすい礎石上面や貫石接合部に埋納されていた銭は、錆がすんで細片化したものが多く、ミニマムで三五三枚を算える（細片は寶の字だけを算える方法をとった）。

この埋納された銭は、無作為に封入されたものだとすれば、その種類別割合は、鳥居建造当時に、流通していた銭貨の割合を示すものと考えられる。銭がはさまれていた理由については、様々な解釈がなされるが、現在のところいえることは、鉄製のクサビや漆喰とともに、石の隙間をつめガタをなくすためのクサビとして、技術的に機能していたと考えられることがある。これらの銭は後世の抜き取りはあつたとしても、銭の埋納状態や、新寛永が混入していないこと、さらに、元禄九年の建造以来今日まで解体修理などが行われたという記録がないことか

ら、後世の挿入によるものではないと判断できる。図IVからもわかるように、柱の継目の高さが、約二・五メートルと高めだったことも錢の保存に幸いしたと思われる。

判読可能な錢二九二枚の内訳は、表VIのように古寛永一九九枚（六八・二%）文錢八七枚（二九・八%）・渡来錢六枚（二・一%）である。このことから、渡来錢は一七世紀末にはほとんど駆逐されてしまっていたことがわかる。元禄九年当時、最新の錢であつた文錢が、約三割も存在していることは注目に値する。また、寛文から延宝に改元されたことによつて、背「文」を削つたとされる新寛永通寶（一六七四年初鋳）については、判読可能な錢の中に一枚も入つておらず、文錢の多さと考え合わせると、この寛永通寶の流通には疑問がもたれる。

紀年銘がある鳥居に埋納されている錢は、後世に挿入された形跡が認められず、また解体修理も行われないままであつたとすれば、そこに封入されていた錢は、建造当時流通していた錢の組合せを知る格好の資料となる。今後解体される古い鳥居については、錢が埋納されている可能性を考慮し、文化財専門職員が必ず立ち合うべきだと考える。

鳥居に限らず、石造建築物には錢が埋納されている可能性があるので、注意を要する。長崎県諫早市では石製仁王経三重の塔の基壇下から、一二枚の寛永通寶が出土した。<sup>(13)</sup> この塔は享保一六年（一七三一）に建てられたことを、文献<sup>(14)</sup>から確認できるし、基壇部分については動かされた形跡はない。一二枚の内訳は、古寛永が五枚、文錢一枚、新寛永が六枚である。この割合も、その当時の錢貨構成割合の目安となる。この他、神戸市の敦盛塚でも、宝暦年間頃に埋納されたものと思われる三七一枚の寛永通寶が報告されている。<sup>(15)</sup> すきまをつめるパッキンの役目をした錢としては、幕末の例だが、諫早市の眼鏡橋がある。石のすきまから、寛永鉄錢八枚と天保通寶一枚が採集されている。<sup>(16)</sup>

以上述べてきたように、近世の錢貨流通の実態を知ることができるものとして、六道錢以外にも、石製鳥居や石塔などの石造建築物に埋納された錢が存在する可能性はある。それらの発見に努めたい。福岡県行橋市の鳥居の調査例で、元禄・享保・化政期に鳥居の建造ブームらしきものがあるとの指摘もあり、<sup>(17)</sup> 資料増加の可能性はある。

## 八 成果と課題

最後に、本稿で述べてきたことを簡単にまとめると、

- ① 六道銭の組合せを分析することによって、近世墓の時期決定が可能であり、錢貨の流通状況を復元することも可能である。また、鳥居埋納の錢貨のように、六道銭以外にも錢貨の流通状況を知ることができる資料が存在する。
- ② 従来考えられていたよりも迅速に、渡来錢から古寛永通寶への通貨の切り替えが行われた。渡来錢は、一七世紀末には流通市場からほとんど姿を消してしまう。寛永通寶は鋳造後比較的短期間のうちに北部九州で広く流通している。
- ③ 六道銭の副葬枚数が二桁と多い墓は一七世紀以前の古い墓だといえる。六枚セットで副葬されることが一般化するのは、一七世紀になつてからだと考えられる。
- ④ 北部九州地方では、渡来錢のなかで永樂通寶の占める割合が低く、東国とは状況が異なつていて、背「文」を削つたとされる新寛永通寶（一六七四年初鑄）の流通には疑問がもたれる。

以上のこととが、本稿でとりあげた資料からわかる。

今後の課題としては、その実態がほとんどわかつていない長崎貿易銭や、小倉藩の寛永年間の鋳錢事業について、貨幣そのものの探索と並行して、細川日帳などの詳細な文献記録の探索の必要がある。また、錢貨の化学的研究（金属組成の分析など）<sup>(18)(19)</sup>の成果を利用できないかを、検討する必要もある。特に、錆や磨耗がひどくて錢名がよみとれないような、状態の悪い錢について、その成分分析で錢種が判別できいか。あるいは、錆着している錢をソフトX線撮影により、剥がさずに錢名を読み取る方法も活用すべきであろう。今後は対象地域を広げ、大分・熊本・宮崎・鹿児島・山口などの周辺地域での資料収集を行っていくが、その報告は別稿で行う。

謝辞 本稿の作成にさいして、九州地方における出土六道銭の調査の必要を筆者に示唆された慶應義塾大学鈴木公雄教授、文献資料検索の場を提供してくださった九州大学西谷正教授に何よりもまずお礼申し上げる。また、資料を提供してくださった教育委員会関係者各位に深く感謝する次第である。

(注)

申し上げるしだいである。

- (1) 鈴木公雄・「出土六道錢の組合せからみた江戸時代前期の銅錢流通」『社会経済史学』第五三卷六号、一九八八。
- (2) 龍谷大学編纂・『仏教大辭彙』第六巻、P四六一〇、富山房、一九二二。
- (3) 渡辺正氣・「和同錢副葬の一歳骨器」『九州考古学』一、一九五七。
- (4) 福岡県教育委員会・『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告XX』一九七八。
- (5) 栄原永遠男・『朝日百科日本の歴史』第二巻古代、朝日新聞、一九八九。
- (6) 松浦秀光・『禪家の葬法と追善供養の研究』山喜房、一九六九。
- (7) 鈴木公雄・「出土六道錢の枚数と墓の保存状態」『考古学の世界』新人物往来社、一九八九。
- (8) 魚津市教育委員会・『印田近世墓』一九八一。
- (9) 櫻木晋一・「博多二二次(天福寺)・箱崎馬出遺跡群の出土六道錢」『福岡県地域史研究』第九号、一九九〇。
- (10) 北九州市所在の兩遺跡については、概報がでているのみで、正式な報告書は発刊準備中である。北九州市教育文化事業団の吉木章・中村修身・梅崎恵司・川上秀秋・宇野慎敏・小方泰宏各氏の御好意により筆者が分析することを許された。御協力・御教示に対し、深くお礼を
- (11) 日本銀行調査局・『國録日本の貨幣二』東洋経済新報社、一九七三。
- (12) この錢貨については正式な報告書が太宰府市教育委員会から刊行される予定になっている。この錢貨分類は筆者が行つたが、それを許された太宰府市教育委員会の狭川真一・山村信榮氏並びに、太宰府天満宮文化研究所小西信二氏の御好意に深く感謝する。
- (13) この錢貨についての報告書はでていない。本資料は諫早市郷土館所蔵であり、同館に展示されている。諫早市郷土館の山口八郎氏の御好意で分析を許された。
- (14) 諫早史談会・『愛宕社調査報告書』一九八五。
- (15) 神戸市教育委員会・『昭和六〇年度神戸市埋蔵文化財年報』一九八八。
- (16) この錢貨についての報告書はでていない。本資料は諫早市郷土館所蔵であり、同館に展示してある。
- (17) 行橋市教育委員会・『近世宗教文化財調査報告書』(その一 江戸時代の神社石造美術)一九七九。
- (18) 佐野有司他・「多変量解析法を用いる古錢の化学組成の研究」『古文化財の科学』第二八号、一九八三。
- (19) 甲賀宣政・「古錢分析表」『考古学雑誌』第九卷七号、一九一九。